

三好正巳教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 杉野 罔 明

三好正巳先生は1997年3月末日をもって、立命館大学を定年退職されることとなります。三好先生の卓越した研究や教育実績、さらには大学や経済学部における多大な功績を記念するために、多くの方々より寄せられた論文を特集し、これを『立命館経済学』として刊行することになりました。

三好先生は、1931年、福岡県でお生まれになり、1954年に九州大学経済学部を卒業、その後1959年に九州大学大学院経済学研究科博士課程を修了、同大学経済学部の助手を勤めました。さらに1961年には、鹿児島県立短期大学に助手として赴任され、以後、講師、助教授となり、1969年に立命館大学経済学部の助教授として着任し、1972年には教授となりました。

先生は1969年の着任後まもなく学生補導主事となられたのをはじめ、1974年には、二部経済学部主事、さらに1981年より立命館大学学生部長、1990年よりは経済学部長、大学院研究科長などの重責をはたされ、立命館大学と経済学部における研究と教育の発展に大きく寄与されました。

この間、先生は自らの問題意識と現実の実態を把握するため、1978年から1979年にかけて、ソ連とフランス、1985年にはフランス、さらに1995年には共同研究でロシアへ、1996年にはスウェーデンに留学されております。

三好先生の研究は、産業労働論を中心としながらも、その研究分野は多岐にわたっています。資本蓄積論を基軸とした分野では、超過利潤論、独占利潤と中小企業、創業者利得、独占価格論、株式会社論などが多面的に論究され、現代における社会構造や政策との関連では、労働行政、社会政策、中間層の問題、国家論、植民地論、社会システム論、生協論、さらには先生の中心的な研究課題である産業労働の分野では、賃金論、労働組織論、労働組合論、貧困化や失業論、労働改革論、労働者権利論、社会福祉論などがあり、先生がこれまでに公表されてきた論文は、全体で70を優に超え、その他に書評や調査報告などの業績も数多く残されております。

このように先生の研究は、現代資本主義の基本的構造を価値次元からきっちりと把握され、かつ現代における生産力の発達に伴って、労働組織や産業組織がいかに変化し、さらに国家による社会政策や労働政策の展開によって、労働組合運動や労働者の権利を守る運動がどのように変化していくのかということ、いわば国民経済の相互関連とその動態の中で産業労働を把握するという極めて科学的な方法に貫かれております。とくに、国家論や国家独占資本主義、生協などとの関連では、フランスやロシア（ソ連）、スウェーデンなどにおける自らの体験をふまえて論理を構築するという国際的な視野と実証性をもった研究方法をとられていることも、先生の研究がもっている特徴の一つであります。

先生の永年にわたる研究業績は、1993年に刊行された『産業労働論序説—生産システムと労働—』（法律文化社）において見事に結実されております。この『産業労働論序説』によって、先生は立命館大学経済学博士の学位を取得されましたが、このことは、問題意識の先鋭さ、研究方

法の確かさ、その理論的水準の高さなど、総じて先生の学問的業績が社会的に高く評価されたことを意味しています。

また、先生は28年に及ぶ立命館大学の在職中、ゼミや講義などを通じて、多くの学生や院生を育てられ、かつ社会に送り出してきました。これらの教え子が社会で大いに活躍しているのも、先生の優れた社会的貢献の一つであり、それは先生の誠実、温厚、謙虚なお人柄の現れでもあります。

立命館大学経済学部は、今日の国際化、情報化などの新しいメガ・トレンドをふまえ、国民をはじめ世界の人々のニーズに応えるために、その教学内容を大きく刷新し、キャンパスも1998年4月よりは琵琶湖・草津キャンパスへと新しく展開することになっております。この時期にあつて、これまでに大学と経済学部の民主的な運営をはじめ、研究と教育のあり方などについてご指導をいただいてきた三好先生が定年でご退任されますことは、誠に大きな損失であり、惜別の情、耐えがたいものがあります。しかしながら、幸いにして、先生はご退職後も本学の特別任用教授に就任することが決まっております。今後とも、一層のご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

最後になって恐縮ですが、立命館大学経済学部の教職員をはじめ、学生、院生ともども先生のご功績に心より敬意を表すとともに、今後とも益々ご健康で、ご活躍が続けられますことを祈念いたします。

1997年1月

